

母親がかわれば社会がかわる

新座母親大会の22年

新座母親大会連絡会 竹森 絹子

1. 日本母親大会の歴史

第二次大戦中の1945年、日本は世界で初めて、ヒロシマ・ナガサキで原爆の被害を受けました。それから9年後の1954年、アメリカのピキニ環礁での水爆実験で、日本の漁船が被爆しました。三たび死の灰の犠牲者を出したのをきっかけに、日本の母親たちが、「子どもたちを核戦争から守ろう!」と、世界で初めて、原水爆禁止の運動に立ち上がりました。その訴えは世界に広がり、世界母親大会がスイスで開かれました。

その運動の先頭に立ったのが、戦前から女性の自立や解放運動をすすめてきた、平塚らいてうや植村環、丸岡秀子、羽仁節子、高田なほ子たちの各氏でした。「世界のお母さん、思想・信条・人種を超えて、核戦争から子どものいのちを守りましょう」と呼びかけたのです。

世界母親大会は、68カ国から1060名の女性たちが参加しました。これは世界の女性史上、初めてのことと言われました。「生命(いのち)を生み出す母親は、生命を育て、生命を守ることをのぞみます」という母親大会のスローガンは、この大会に寄せたギリシアの女性詩人の詩から生まれたものです。

日本母親大会は1955年、世界大会をきっかけに第1回大会が開かれ、以後42年間、日本の各地を会場に開催され続けています。また県や自治体にも母親大会は広がっています。

2. 新座母親大会のあゆみ

新座母親大会は1975年に、第1回大会が開催されました。



それまでは1963(昭和38)年から12年間、「朝霞地域母親大会」として、朝霞・志木・新座・和光の4市合同の大会を開催し、話し合いの中から平和と基地の問題、自然や生活環境を守る運動、小学校の新設や保育所・学童保育所づくりの運動などが取り組まれてきました。

新座母親大会は、第1回から第12回まで大会実行委員長をつとめられた大矢恒子さんが、日本母親大会の発足当初から、「日本子どもを守る会」の運動と共に関わってきたこともあり、新座母親大会の発足や運営に、当時の日本母親大会実行委員長の山家和子さんや升井登女尾さんの支援を得て、「いのちと平和を守るために、思想・信条をこえて手をつなぎましょう」という母親大会の精神のもとに、広く市民の参加をよびかけました。

その結果、市内の多くの団体(現在では14)や地域で活躍する多様な市民が参加して、実行委員会が構成されました。現在では30名余のメンバーになります。

新座母親大会は、21年間、22回の大会を開催してきましたが、その特徴をあげると次のようなこ

とが言えるでしょう。

3. 新座母親大会の特徴

(1)実行委員会の構成が多様である。

理由は先に述べたとおりです。

(2)市内の公立小・中学校を会場にしている。

毎年、実行委員が会場予定校を訪れ、学校長に申し入れ、現在までに17の学校で開催してきました。母親大会は新座の各地に広がっています。

(3)大会の内容が豊富である。

大会当日は午前を分科会、午後を全体会としています。分科会は、第1回大会から平均7つの分科会を開設してきました。テーマは時々の社会の動きをとらえながら、子育て・教育・福祉・環境・平和・男女平等など、広く市民が参加できるような分科会を心がけています。

全体会の記念講演では、教育者の丸木政臣さん、寅さんでおなじみの映画監督の山田洋次さん、マンガ家の手塚治虫さん、評論家の樋口恵子さんや依藤子さん、ジャーナリストの斎藤茂男さん、憲法学者の星野安三郎さんなど、各ジャンルで活躍されている講師を招いています。

(4)多様な市民の参加がある。

男性も含め、参加者が多いことも特徴の一つと言われます。多い時には800名をこえる参加者がありましたが、しかし、最近では400名前後となっており、時代や社会の変化を受けて、これからの母親大会のありかたが実行委員会でも論議されるようになりました。

(5)母親大会の話し合いから、全市的な市民運動が生まれている。

例をあげれば「新座おやこ劇場づくり」「学校給食センター化反対運動」「学習指導要領の見直しを求める意見書の議会陳情のとりくみ」「わがまち新座を考えよう市民ネットワークの発足」、そして昨年とりくまれた「戦後50年、ピース・ウィ・イ 新座」のとりくみなどです。



4. 新座母親大会の今日的意義と展望

去年は戦後50年、被爆50年の年でした。国や自治体を始めとして、地域の草の根の市民団体も、戦争の検証と反省をすとりくみをして、平和を守る決意を新たにしました。

今年に憲法施行50年の年です。戦後の民主主義憲法は「国民の主権」と、「戦争の放棄」「男女平等」を確立しました。戦後、日本の平和を守る運動は、女性たちによって大きく広がり、日本の女性たちが始めた原水爆禁止の運動は、いま世界の潮流になりました。

しかし、残念ながら、昨年来、フランス・中国の核実験がくりかえされ、私たちはいまだに核戦争の恐怖から解放されておりません。母親大会がいまなおその使命を終えず、今日的な意義を持つのはそのためです。

「生命（いのち）を守る母親は、生命を育て、生命を守ることこそをのぞみます」「母親がかわれば社会がかわる」という、この二つのスローガンをかけ、母親大会が長い年月をかけて運動してきたものは、「女の母性を強調する」母親運動ではなく、日本国憲法にねざした「平和」と「いのち」と「人権」を守る女性たちの、言い換えれば、母性を共有する女と男の運動なのです。